

『散華集』（西村心随（素時雨）の追善句集）
にかかわる法蔵寺の心随の墓、青木以文の墓
及び生家の心随句碑、隣家の以文の顕彰碑巡り

資料

- 1 法蔵寺 10：00～10：30
西村家の墓地 心随の墓 説明
青木家の墓地 以文の墓 説明
- 2 西村家 10：40～11：00
心随の句碑説明
- 3 青木家 11：10～11：20
以文の顕彰碑説明

令和4年11月11日（金） 10：00～12：00

川中島町句碑・俳額研究会

一 『散華集』について

『散華集』は素時雨四世を継いだ子息の西村素十と同門の門弟による追善句集である。

嘉永4年2月4日病にて82歳の生涯を閉じた

心随翁しんずいを追悼するため、門人をはじめ北信一帯の著名俳人及びその門弟によって追善句集が発刊された。

隣家の宮本虎杖の同門である青木以文いぶんの序文によると

その年の秋である嘉永4（1851）年秋に上梓されている。

大きさは縦22センチ、横15センチ（現在のA5版）で

41丁からなり図版、和装本である。

内容の細目は序文として①虎杖四世きしゆ亀守（真篤ますず）と以文、

②彩色の心随の肖像画、③代表句である「散る花を同行にして旅うれし」の句を掲げ、④次に「四時之吟」、⑤芭蕉発句の「脇

起俳諧」、桐翁居士の「脇起俳諧」、⑥「春之部」、「夏之部」、

「秋之部」、「冬之部」へと続き、⑦後書として小林迎祥げいしょうが

記している。

全体の句数は791句の多数が掲載され、地元川中島町を

中心に北信地域から、当時の著名俳人及び同門同行者によ

る俳人、東信、中信、南信からの俳人が掲載されている。

二 法蔵寺の虎杖句碑、心随の墓、以文の墓

- 1 法蔵寺の宮本虎杖句碑こじょうと俳額について
- 2 西村心随の墓について
- 3 青木以文の墓について
- 4 心随の経歴、以文の経歴、虎杖の経歴

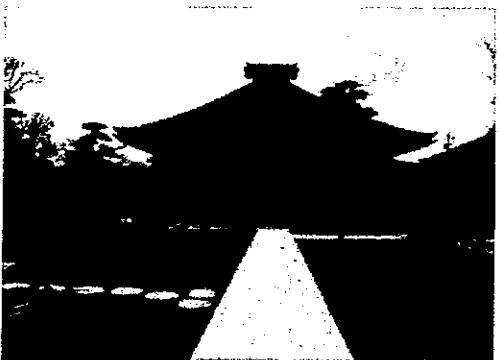
1 法蔵寺の宮本虎杖句碑と俳額について

(1) 法蔵寺 川中島町御厨荒町 浄土宗京都知恩院末

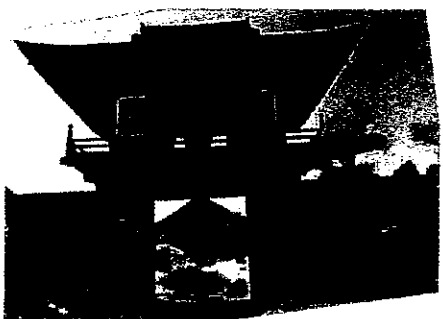
宝治二年(1248)によって創建された。本堂は昭和32年に大修理落慶されたものである。安永八年(1779)建立の鐘楼門、徳

本上人名号碑、俳人虎杖の句碑がある。観音堂には千手観音像、

西国三十三番観音像が安置されている。



法蔵寺本堂

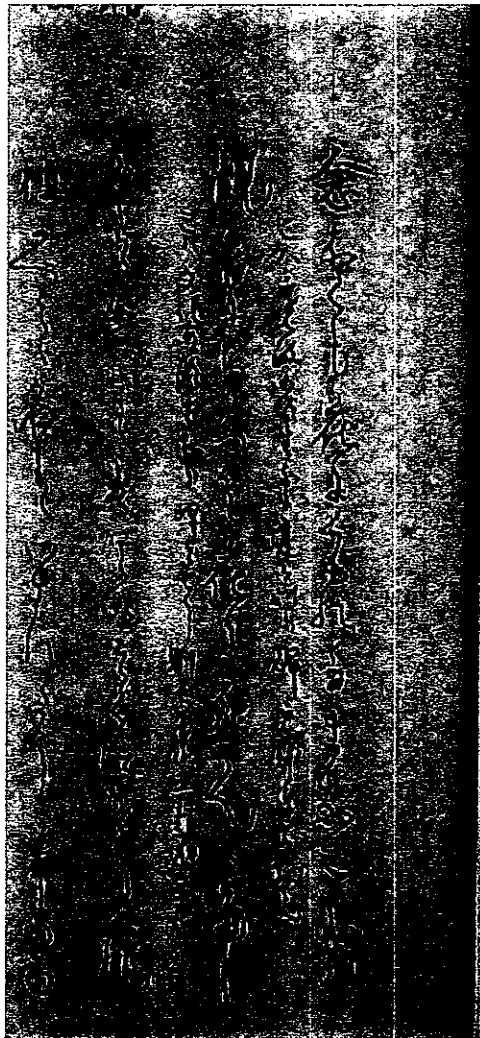


山門

(2) 宮本虎杖の句碑と俳額

念なくも花にくもれるまなこ哉

法蔵寺の宮本虎杖の句碑は戸部村の戸部連によつて建立されたが建立日が刻まれていない。しかし文政七年宮本八郎編『はなの』には「こは寛政の頃、生前に建る処の碑、戸部連の功也」と書かれている。



宮本虎杖の在野研究家高野六雄氏の著『俳人宮本虎杖』の虎杖年

譜によると寛政六年（1794）ごろかと記載されている。花曇連の俳額が文政四年（1821）であるから句碑が建立されて27年後に俳額が法蔵寺に奉額されたことになる。句碑建立の戸部連（俳諧結社）と俳額掲額の花曇連で指導的役割をしたと思われる西村素時雨（心随）、青木九峩（以文）等は法蔵寺の檀家でもあることから法蔵寺に句碑建

立や俳額を奉額をしたのであろうか。



右の上の句碑はおもてであり、側面に句がきざまれている。背面にと戸部連と刻印されている。

俳額に奉句されている43句の俳人は4人の川中島以外の俳人を除いて戸部連がほとんどである。

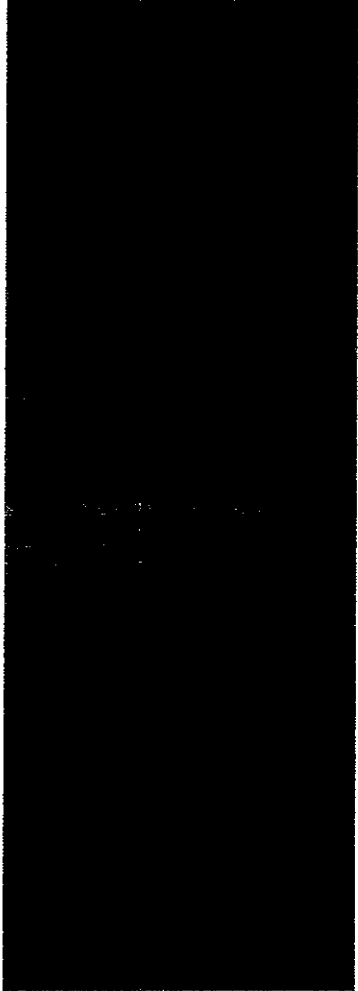
注

宮本虎杖 寛保元年（1741）生。文政六年（1823）8月13日没。

83才。

宮本舟山 寛政五年（1793）生。天保十一年（1840）2月3日没。

48才。法蔵寺俳額文政四年（1821）奉額の選者。



翻刻 念奈く母花尔くも麗留眼哉

解説 念なくも花にくもれる眼まなこかな

意味 ことさらに風雅を思う念がなくても桜の花が眼いっぱい

はいつてくる有難いことだ

句碑は虎杖の筆とされており、虎杖の他の筆跡から確信され

るが、俳額の筆者は判然としない。句碑が虎杖の書であるとするならば「眼哉」と俳額の「眼かな」と違う。また、長野県石碑目録

(平成2年刊長野県教育委員会)によると虎杖の句は「鳥なく

も」と書かれているが、「念なくも」が正しいとされ、法蔵寺の案内板にもそのように書かれている。今回俳額及び八朗編『はなの』から、当研究会でも案内板の通りであるとした。

寛政11年虎杖庵日々稿

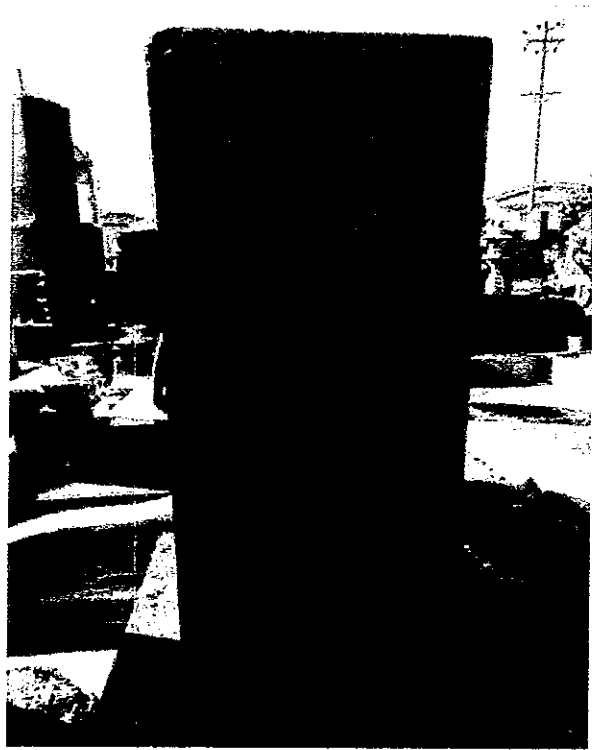
句碑が虎杖の自筆ならば54才の時に書いたことになる。で、

右の『虎杖庵日々稿』は寛政11年で5年後であるが、筆跡は句碑と似ている。俳額の文政四年には虎杖81才生存している

が、句は無いところから筆者ではないと考えられる。九峩（以文）か。または八朗か。左は以文の書

2 西村心随（素時雨）の墓について

西村心随の墓は法蔵寺の墓地にある。西村家累代の墓の向かって右側の墓の中にある。



心随の墓

墓の正面には3人の戒名が刻印されその真ん中に心随の戒名が刻まれている。

一連 深譽心随信士

とある。また向かって左の側面に文政三年十月十七日が刻まれている。心随は嘉永四年二月四日八十二歳の長寿をもってなくなっている。文政三年は何を意味するか。

また法蔵寺の過去帳には次のように記されている。

深譽悟窓心随比丘 畑中民彌養父

尚比丘とは出家して一定の戒を受けた男子をいう。

3 青木以文（九峯）の墓について

青木以文の墓も法蔵寺の墓地にある。青木家累代の墓の南側に以文の墓がある。



以文の墓

墓の正面に以文の戒名が刻印されている。

教譽學道以文居士

南向きの側面に

安政二乙卯年五月二十五日没

と刻まれている。

また北側には父久五郎の門弟による頌徳碑がある。

墓の裏面に「文化八年辛未七月五日筆弟中」と刻まれている。

4 心随、以文、虎杖の経歴

(1) 心随の経歴

しんずい 心随 そしぐれ (素時雨)

本名西村金吾。長野市川中島町御厨戸部の

人。明和七(1770)生。若くして宮本虎杖の門に入り、俳諧を学び高弟となる。初号素十、素時雨。文政十二(1829)年還暦のおり心随と改める。警枕舎、曲素子、桐翁等の別号がある。素時雨の号を息子素十に与えた。

寛政年間(1800年頃)、地元戸部連と図り、法蔵寺内に師虎杖の句碑を建立した。文政四(1821)年春、句碑の記念として同寺観音堂に俳額を奉納する。また永年にわたり戸部連の指導者として俳諧の普及に尽力する。嘉永四(1851)年2月4日没。82歳。法誉悟窓心随比丘。

法蔵寺に埋葬される。同年追全集『散華集』が息子の素十により、宮本真篤編集幹によって刊行される。明治十七(1884)四月戸部連により心随句碑が自宅に建立された。

また『散華集』(長野県立図書館蔵)に隣家の同門青木以文の賛がある。この西村家には川村碩布が訪れたこともある。

また小林一茶も訪れたとの口伝もある。虎杖、葛三等白雄門の俳書に作品が多い。

(2) 以文の経歴

以文いぶん（九峩きゅうが）

本名青木民八反章。長野市川中島町御厨戸部の

人。別号撫古斎。以文。安永二（1773）年三月農民久五郎の子として生。父が寺子屋を開いた関係で九峨も近郷の子弟に教授した。俳諧を虎杖に、心学を戸倉町柏王の中村習輔に学び、一家をなした。俳諧の初見は『つきよほとけ』である。漢文をよくし宮本舟山編『はなの』の巻頭に白雄、葛三、虎杖の伝記を掲げている。法蔵寺の俳額にも「虎杖翁碑並びに序」を草し虎杖研究に有益な資料を提供している。

また『散華集』の序文に心随を悼む漢文が掲載されている。さらに心随を讚する軸が西村家に所蔵されている。文化十年戸倉町若宮の佐良志奈神社常夜灯にもその漢文がみえる。交友に佐久間象山がいる。虎杖門下中学者として重きをなした。安政二（1855）年五月二十五日没。八十三歳。

(3) 虎杖の経歴

宮本虎杖 本名道孟。通称清吉、八郎兵衛。号古慊、天姥、虎杖庵梨翁、更級庵。寛永元(1724)年戸倉の農家に生。明和

5 (1768) 加舎白雄に師事。師に従い北陸、関西を巡り薫陶を受ける。天明4 (1784) 年、虎杖庵を称す。北信一帯の俳諧師として活躍。白雄没後、春秋庵長老として尽力。姨捨山や善光寺を訪れる俳人を庇護したため全国に名がしられた。文政6 (1823) 年8月13日没。83歳。墓は戸倉駅裏山の堂墓地にある。句碑は5か所、俳額は判明しているもので21か所。門下から後の春秋庵主倉田葛三や宮澤武日など有望な人材を輩出。また虎杖庵三世八朗は息子である。編著に『つきよほとけ』、『いぬかや集』などがある。

なお、虎杖の資料は千曲市に寄贈されている。

三 心随句碑及び以文頌徳碑

1 心随句碑

西村心随句碑は川中島町御厨畑中の西村静男宅の玄関入口に建立されている。



心随の句碑

刻まれている句は

ちる花を同行にして旅うれし 心随

『散華集』の本文にこの句が一ページにわたって掲載されている。

ちる花を同行にして旅うれし 心随

連句のページにまたこの句が掲載されている。然しこの句は

ちる花を同行にして旅嬉し 桐翁居士

と掲載されている。

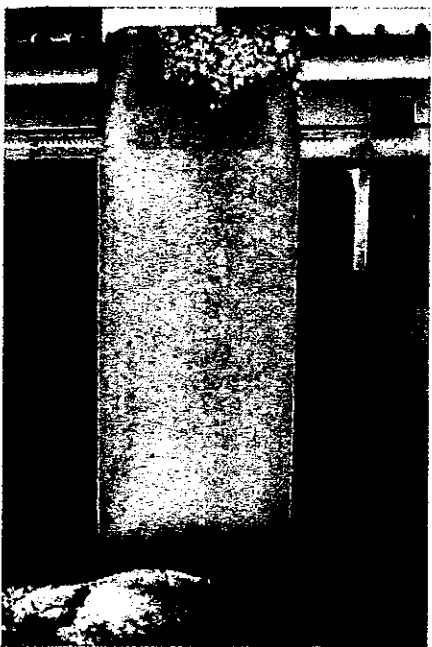
明治17(1884)年4月戸部連社中により建立された。

棹石は高さ69cm、幅77cm、奥行9cmで、

台石は高さ43cm、幅83cmである。

2 以文の頌徳碑

青木以文の頌徳碑は青木家の庭の入口南側に建立されている。建立された時は法蔵寺前に建立されていた。



以文の頌徳碑

頌徳碑に刻まれている漢文は碑の正面の下が崩れ判読できないので『長野県町村誌北信編』御厨村（1353頁明治十四年三月調べ）の資料を引用する。

青木以文碑銘

信州川中島、更級郡戸部村、有翁、名以文、字友章青木氏稱民八號
撫古齋家世農、父稱久五郎農隙以潤字教幼童至翁好讀書以其所得授
郷黨子弟遠近來人其門者蓋千有餘人。翁為人篤実勤儉、家無儻石之
儲晏如也。其書學薰玄宰又頗以賦詩作文為娛至老矻矻不懈。

上田侯嘉其為人屢有賞賚翁以安永三年三月生以安政二年五月二十五
日歿、得壽八十二門人釀金立石以圖不朽介高野敏郷謁余文蓋川中島
古昔用武之地元龜天正之際甲越争鋒此地每當其衝想其民朝奔暮竄求
一日之安而不可得當時士大夫尚木訥椎魯未有能解讀書者也況於編戶

小民乎戢戈以来昇平日久。

国家德澤涵煦及草莽往々有以文學教授其郷者若翁者亦一也。

翁之行跡雖無赫々可録然亦有足以驗德澤一端者。是則不可以不記

翁有一男名樸號謙齋能承箕裘係以銘曰

舉世滔々 唯利是競 嗚呼誰也

能脱其病 獨有此翁 淡泊其性

克勤克儉 敦篤其行 及鑄貞珉

永傳名姓

安政五年戊午十二月

昌平饗教官 河田興撰

上田藩士 原天根書

碑は

棹石 高さ 175 cm、幅 74 cm、奥行 9 cm

台石 高さ 57 cm、幅 186 cm、奥行 105 cmである

なお右側に父久五郎（謙齋^{けんさい}）の碑がほぼ同じ大きさで建立されている。

また以文は『散華集』において序文において漢文による賛を掲載している。